ネパール地震救援事業　報告書

第 3 班 事務管理要員　李　壽陽

発災から 2 カ月余りが経過した 2015 年 7 月 7 日（火）、ネパールを継続して支援するため、保健医療チームの第 3 班としてシンデュルパルチョーク郡メラムチ村へ 5 週間派遣されました。緊急救援活動をおこなう保健医療チームとしては最終の派遣で、私は事務管理要員として、主に、現地スタッフおよび活動費の管理、活動地からの撤収作業、資機材の引継業務に従事しました。以下に報告します。

（1）現地スタッフおよび活動費の管理

第 3 班着任時には、計 11 名の現地スタッフ（現地スタッフマネージャー、ネパール赤十字社ボランティア、通訳 5 名、洗濯・清掃・調理担当、技術系業務の補佐等）が日赤の緊急救援事業に携わっていました。朝 8 時になると洗濯や掃除を担当するスタッフが到着し、9 時頃には現地診療所やチャイルドフレンドリースペース（被災した子どもたちの遊び場、こころのケア活動の一環として提供）で通訳を担当するスタッフが、一日の活動を開始しました。私は事務管理要員として、メラムチでの日赤の緊急救援活動終了時まで、現地スタッフの勤怠管理および活動状況の確認をおこない、週毎の給与支給にあわせて準備をしました。

活動終了時には、現地スタッフのこれまでの活動について謝意を伝え、派遣要員全員からメッセージを集めたカードを手渡しました。現地スタッフの中には、発災直後から緊急救援活動終了までの約 3 ヶ月間、ずっと日赤と協働したスタッフもいたため、最終日を見届けることはとても感慨深い思いがある一方で、少し寂しい思いもありました。

就労証明書とﾒｯｾｰｼﾞｶｰﾄﾞを手にする現地スタッフ

現地スタッフと第三班派遣要員のグループ写真

（２）活動地からの撤収作業

第 3 班では、活動拠点を次第に縮小し、最終的に撤収しましたが、その際には現地の方々のサポートが不可欠でした。具体的には、テントの解体、石柱の撤去、砂利の整理、資材の運搬等の作業があり、これまで日赤が活動していた拠点を、拠点設営前の元の状態に戻さなければなりませんでした。今回のネパール派遣では多くの資機材を展開していたことから、撤収作業には暑い中での重労働が続きました。そのような環境下にも関わらず、精力的に働く現地ワーカーの姿がとても印象的でした。第 1 班派遣時からサポートしてくれていた方々も多く、第 3 班活動時にはすでに慣れた様子で、特にテント解体時の手際のよさにはとても驚きました。彼らの献身的な働きがあったからこそ、すべての撤収作業を限られた期間で無事に終了することができたといっても過言ではありません。暑い中、一生懸命働いてくれた現地ワーカーへ一日の終わりに賃金を手渡し、笑顔で受け取る姿をみること、そしてまた次の日も活動地で現地の方々と派遣要員が共に一丸となって作業する姿をみることは、緊急救援事業に関わることができて大変嬉しく感じた瞬間でした。

一日の始まりは出勤確認から

第三班着任時の居住地

活動拠点縮小の様子

現地ワーカーはテントを手際よく解体

資機材移動の準備

（3）資機材の引継

活動地からの撤収作業とあわせて、資機材の引き継ぎも第 3 班の重要な役割のひとつでした。資機材を現地赤十字社等へ寄贈し、今後も引き続き現地で活用していただくためです。

資機材を一つ一つ数え、寄贈先へ提供する品目表を最終化し、資機材移送の手配をチームでおこないました。今回、資機材の移送先は主に 4 カ所に分かれており、メラムチ、首都カトマンズ、チョータラ（メラムチから東へ車で約 2～3 時間）、バラトプル（メラムチから車で約 5 時間、カトマンズよりさらに西へ約 150km）でした。限られた期間で確実に資機材を寄贈先へ引き渡すことができるように、「いつ」・「どこに」・「どの」資機材を移送する予定なのか、資機材移送の準備のためには「いつ」・「何名の」現地ワーカーが必要なのか等の計画をなるべく早期から立てておき、関係者間で連携しながら調整することが、事務管理要員にとって非常に重要な役割であることを理解しました。その計画に基づきチームが実際に動くためには、派遣要員一人一人が自身の役割を理解し、業務に責任をもって遂行することが求められました。

資機材と寄贈品目表の最終確認作業

資機材の輸送を含めて移動では山道が多い

バラトプルの倉庫で移送済資機材の保管状況を確認

資機材がすべて移送されたあとの活動拠点跡地

今回、緊急救援事業へ初めて派遣され、最終班の事務管理要員としてさまざまなことを見て経験しました。現地では難しいことやうまくいかないことも多々ありましたが、だからこそコミュニケーションを常に大切にし、関係機関と調整しながら柔軟に対応する姿勢が重要だと感じました。地震被害の大きかったメラムチ村で緊急救援事業の最後まで現地の方々と協力して活動できたことは、赤十字の国際活動に携わることができて本当によかったと思える一面です。

今回の地震により甚大な被害を被ったネパールの一日も早い復興を願うとともに、平素より日本赤十字社の国際活動へ多大なるご理解、ご支援を賜り感謝申し上げます。